
短編集 掌篇

かわ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短編集 掌篇

【Nコード】

N2372Q

【作者名】

かわ

【あらすじ】

サイトやブログに上げていた単品作品の内、比較的短い作品を置いています。暗かったり能天気だったり、傾向は様々です。

01-05(前書き)

便宜上、はじめに数字を振っていますがそれぞれ独立しています。

01

心から望むというのなら、貴方にそれを捧げよう

本当の誠実さと言うものが、この世にどれほどあるものか
確かめることにさえ、私は疲れてしまったから

貴方が、代わりに全てを見極めておくれ

(2007 / 12 / 1

4)

02

Q・ 貴方にとって怖い物は何？

「女の嫉妬」

「……………」

「なんだよ」

「いや、確かにいつか刺されそうだな。お前」

「舐めんな。刺される前に避けてやる。それから即効警察いきゃい

「いだけじゃねえか、そんなの」

「……………」

「そう言うあんたはどうなんだ」

「何が？」

「コワイモノ」

「……………しいて言うなら、恐怖かな」

「あ？」

「怖いって誰でも持つてる感情だろ？それが恐怖を恐怖と感じなくなるのが、恐い」

「何だそりゃ」

「わからないなら、それでいいんだ」

(2007 / 12 / 1

4

4

03

”窓”と言つものが好きだった。

空と繋がった、高いところに鎮座する窓。

その遠い地表に何度誘惑されたかわからない。
けれど、僕はその誘惑に乗ることはない。

どれだけ甘美な誘惑であろうと、手の届くそれは決して抗いきれない引力など持たないから。
望むのは、焦がれるほどに求めて已まない渴望。

それを待って、今日も窓から空を見る。

4)

(2007 / 12 / 1

04

この心臓さえ止まってしまえば、僕はずっと君といられたのだろうか。

この忌まわしい血液が君に息衝く清流に変わったなら、君は僕をみてくれるのだろうか。

どうすれば君と同じにいられるのか、誰か教えてくれないだろうか…

3)

(2008 / 01 / 2

05

ここから出して

あいつが来る前に。

ほら、ずるずると濡れたナニカを引き摺る音が……

出して。ここから出して！

私はまだ死にたくない……！

2008/01/2

7

06・10(前書き)

便宜上、はじめに数字を振っていますがそれぞれ独立しています。

06

「きれいな涙ってどんなだと思う?」

「…何、いきなり」

「ほら、夕日を受けてキラキラとか、大粒なのがぼろっと落っこちたりとかさ、色々あるじゃん」

「……………」

「…なにその目」

「いや?なんでもないけど?」

「なにそれ。すっごいムカつくんだけど!」

「だってお前それ、見た目に騙されてるだけだろ。見た目がよくたって俺のことキレーだとか思わないだろ、お前」

「さりげなく自慢かよ」

「一般論だろ。つまり、傍から見てたんじゃ真意なんかわかんねえってことだよ」

「…俺にはお前の言ってることがわかんないよ」

「じゃ、流してみるか?キレーな涙」

「……………どういう意味?」

「泣きたいなら泣かせてやるってこと。俺にとって綺麗だと思う、お前の涙、見せるよ」

「ちよっ…………っ!」

「…んの、阿呆

ッ

「ちょっと、苛めすぎたかね」

2008/03/1

2)

07

熱いと言うより、冷たく感じた。

こちらからは触れられない熱に煽られた箇所は何の反応も返さないようになって来た。それなのに微かな空気の流れはきちんと感知し、けれどやはり刺すような鋭い冷たさを訴える。

視界は既に閉ざす物を失った。揺れる赤を認知できたのは数瞬の事で、今はただ白く濁った斑のある何かしか見えない。そしてそれも、どれだけの間見ていられるのか…。

舐めるように炭化した皮膚を剥がしては、その下の凝固しかけた蛋白質を同じような煤へと変えてゆく炎。

その中でいて何故私は意識を保っているのだろうか。不可解でしかないはずのそれは、けれど私への業なのだと思う。

…そうとでも思わなければ、受け止めることができなかつた。自分の体が崩れ、白い骨が見え、更にそれが火に炙られて焦げてゆくと言うのに何の痛みも感じない。

いや、感じていないわけではない。

現実的にありえない状況に私の精神があるのなら、その心に痛覚が通ったとしても不思議ではないのではなからうか。

熱によって縮む体が、縛られたロープによって無理矢理引き伸ばされる感覚に、私はこの体の最後を悟る。

火は、恐らく私の体すべてが塵に帰すまで消されることはないだろう。

けれどその時が来たら、この穢れた身が炎によって余すところなく清められたなら。

きっとその時は唯人と同じ臆面のなさで以って、中天の光を見据えよう。

私は、ようやく日の下に歩くのだ。

(2008 / 03 / 2

6)

08

とある、仲のよい親子がいた。

子は母を慕い、母は子を慈しんだ。

そんな親子に、群の仲間は何の関心も寄せず、しかし突き放すこともなかった。

ある時、子が自力では這い登れない穴に落ちた。

母は必死に子を助け出そうとした。けれど子は、母一人の力では持ち上げることは叶わなかった。

群の仲間たちは親子に関心を待たなかった。故に、親子に起こった不幸にも気付かなかった。

もし、仲間と深く絆を繋ぐ術があつたなら。

自らに子を助けるだけの力があつたなら。

母は全ての力なき理由を嘆きながら子と共に横になった。

とある、人も羨む親子がいた。

子は見目品行正しく育ち、親は揺ぎ無い地位を手にしていた。

人はそれらを盗み見ては感嘆した。

ある時、子は進退窮まる事態に見舞われた。

親は自ら動くことはなく、また、他を動かすこともせず、ただ嘆き、周囲を欺く芝居を取ることに尽力した。

人はそれを見て、嘆き、しかし彼らもまた自ら力を貸すことはしなかった。思いつきもしなかった。

子は、親の元へ帰ることはなかった。

ただ、怒り交じりに聴かされた事実を嗤って散った。

力のない絆と、力ある無情の話。

二つ、交わることはないのだろうか

(2008/04/0

5)

09

気付けば、涙が頬を流れていた。

悲しいことがあったわけでも、どこか痛いわけでもない。

ただ本当に、何気なく目にしたその一枚の絵が、どうしてだか俺に涙を流させた。

筆遣いも、常用する色彩からも、あいつの欠片は見出せない。

けれどそれは確かに、俺の大切だった、あいつの絵だった。

ああ、お前の中からはもう、過去の憂いは消えてしまったのか。

その生き生きしたどこにでもある一枚の絵画は、あいつと俺との確かな決別を伝えていた。

優しい子ね、って

言われるたびに、本当はそうじゃないんだって言いたかった。

僕にとってはそれは普通のこと、優しいと言われて感謝されるようなことじゃないんだって、みんなに言われるたびにそう思っている。

僕は善意でそうしたんじゃないんだって、

放っておくのは後味が悪いから、前にそうしたのに今度はしないのは勝手だと思ったから、あるいは初めからこうしておいた方が僕にとって都合が良かったから。 たまたまそれがみんなにとって優しいって言われることだっただけなんだ。

いろんな人に笑顔を向けられるたびに僕は叫びたくなる。

僕はそんな風に言ってもらえる、綺麗な気持ちなんて持っていないんだって。

自分勝手に自己満足の塊なんだって大声で言い放ってやりたくなる。

でもそれが出来ないでいるのも僕の弱さで、そんな僕に、お願いだから感謝なんてしないで欲しいと、いつだって胸のうちはどろどろしてる。

だから僕は、みんなに早くそれに気付いて欲しいって、いつだっ
て勝手に願わずにいられない。
僕は偽善者なんだって、誰でもいいから早く気付いて。

) 2008/04/1

4
)

11-15 (前書き)

便宜上、はじめに数字を振っていますがそれぞれ独立しています。

普段は施錠されている扉を開けた向こうは、どこよりも近く空を感じられた。

雨に濡れた空はその厚い雲の分だけ存在を近く感じる。

半歩遅れて外を見た連れは、僕の感傷にはまるで気付かず目を輝かせ、徐に屋上へと走り出た。咄嗟に手を伸ばして引きとめようとしたが、己の反射神経の鈍さを噛みしめるだけに終わった。

空振りした手の先にはまるで小さな子供のように楽しそうにはしやぐ姿。それを目にしてしまうと、もう風邪をひくからと引き戻す気力すらなくなってしまう。

初めて会ったとき、夏目はまだ10歳をいくらか過ぎたほどで、必然僕も同じくらいの年齢だった。けれど中身は対極で、明るく人懐こかった夏目に対し、僕は只管に冷めたものの見方しかできない子供だった。それでも反発することなく親しくなっていたのは、双方とも己のうちを素直に表に出していたからだと思う。

僕らの年頃の子供にとってここはまさに牢獄。退屈な毎日と儘ならない体に不満を持つのは仕方のないことだと思う。同時に不満を持って何も変わらないことを、僕らは身を以って知っていた。

(2008 / 04 / 1

1 2

同じ過ちを幾度も幾度も繰り返す、
同じ結果に泣く。

同じ廻りを辿っては、
同じ後悔が身を焼いて。

果てない繰り返事は消えることなく、
輪を描いて彷徨う。

それがもし無限の輪廻ではなく、バネの様な螺旋であったなら、
いつか、違う何かをつかめるだろうか…

17

(2008 / 04 / 2

6)

1 3

ねえ目を瞑ってみて、何が見える？

そうじゃないよ。見えないんじゃないよ、それは瞼の裏を見てい
るっていうの。

証拠にほら、少しだけ明るい方を向いたらうつすら紅い枝が見えるでしょう？

ねえ、本当に見えないものなんてこの世にはとても少ししかないんだよ。

目を背けたって逸らせた先を見ているし、逸らしかつたものだって、それが何か臆気にでもわかっているから逸らしているのでしょう。

ねえちゃんと見てよ。

私は意地悪だから、あなたが目を逸らしたって何度でも視線の先に回りこむわ。絶対に逃がしてあげないし、逃げることを許してなんてあげない。

目を開けた先に、いつだって私は立っている。

だからどうせなら、しっかり前を向いて、正面から私と対峙して。

) 2008/05/0

9)

14

例えば何重にもしたガーゼで目隠しをされた感じ。

柔らかくて護ることを目的としたそれは、一枚ずつは薄くても幾

重も連ねれば厚い膜となって、堅固な鎧にもなる。

時には盾に時には壁になって、外界との接触に拘ってくるそれ。けれどもそれは、決して永遠の物ではなくて、患部に触れた箇所から徐々に徐々に廃れていって。

いずれは薄い膜すらも視界を遮る物がなくなる。

でもそれは完全に消えるのではなくて、

或いは瞼に

或いは患部に

或いは、本当は何も変わっていないのかも知れないと不安を残して。

見えないそれを感じながら年を経て行き、

模索し振り返りながらその道を進むか

蹲り、全てを投げ出し止ってしまうか

それらを決めるのは、

目隠しの主次第。

(2008 / 05 / 1

3)

15

ねえ、僕が本当に怖いものはなんだと思う？

君に嫌われることかな？

どうしようもない奴だと呆れられること…嘲られることかな？

うっん。そんなことのはずがない。

君の言葉が何であれ、その一つ一つが今でも僕の宝物だ。

僕が恐いのはただ一つ、

君の

無関心

2008/05/2

3

16・20(前書き)

便宜上、はじめに数字を振っていますがそれぞれ独立しています。

16

この、目の前に広がる広大な青空へ踏み出したらどうなるだろう。そんなの簡単だ。足場がなくなって落っこちて終了。なんのドラマもそこにはありもしない。

そんなどうでもいい事を思いながらフェンスに寄りかかると、斜め後ろにいた悪友に気味悪がられた。曰く、はつきりしないから睨むかにやけるかどちらかにしろ、だそうだ。そんなのは俺の勝手だと思っただけど、まあそれはほら、一つ大人になって飲み込んでおこうじゃないか。

もう一度前を向いて、遮るもののない大空を眼球に映す。

実は眼に映る実像は全てひっくり返っていて、脳で認識する頃には虚像に摩り替わっているらしい景色だろうが、こうして一面青に染められているんなら、これが虚像だろうが実像だろうが関係ない。そんな小さな理屈なんかも、吸い込まれそうな空の彼方へ本当に吸い込まれてしまえばいい。

厭世的な俺も、常識的過ぎる悪友の理性も、何もかも吸い込まれてしまえばいい。

世の中ごちゃごちゃしすぎて本当のことがわからなさ過ぎるんだ。だから、このシンプルな空がこんなに遠く思えてしまうんだ。

(2008 / 05 / 3

1)

さあ、泣け。

お前にはその資格がある。

泣いて喚いて己の無力を思い知るがいい。

無力な己を自覚し、そして打ち砕く方法を見つけたなら、

今度は理性を操って本能を捺じ伏せる。

その有意義さをよくよく噛みしめ理解できたのなら、今度はお前がこつこつ番だ。

x x x x。

それはお前の中で精製され、けれど確かに受け継がれてきたゲーム。[△]

(あえてタイトルをつけるなら伝言ゲームが妥当でしょうか)

(2008/06/0

1)

世界には六十億を越す人間がいる。

馴染みのない桁は実感を伴わないけれど、例えば。

夕方の最寄り駅を利用する、恐らく帰路を辿る人の数を指折れば少しは身近な人口になる。

十分で数人、一時間でも十数人かも知れない。でも一日だと、たくさん。

そのたくさんの中の一人だけの私。

たった一人。

唯一の私。

ちっぽけで矮小で、無力な存在だけれども。

換えのきかない、貴重な私。

そんなワタシタチが集まったのが世界だと思えば、
なんだか愛着だって、湧いてくるってものじゃない。

5)

(2008/06/0

19

泣いた。

不意に泣きたくなくて、わんわんと大声を上げて。

人目も何も気にせず。

思い切り。

泣いて泣いて。それでも涙は止まらなくて、
どうして泣くのかなんてわからない。

理由はあるのかもしれないし、ないのかもしれない。

いや、多分理由はあるんだ。確かに差せる一つがないだけで、無数の微粒が。

それがなんだかわからなくても、涙は正常に流れ出していく。
巻き込んで流れ出して、内から出ていく。

それが悲しくて泣くのもかもしれないし、一つ一つを無意識に感じて泣いているのかもしれない。

わかるのはただ、

涙はまだ止まらないということ。

) 2008 / 06 / 1

1)

20

天に二物を与えられた人間は幸せだ、と言う話はよく聞く。

それは神に愛された証なのだ、と。

けれど、そいつを知っている僕には、それは嘘なのではないかと思えないでいる。

そもそも二物とは何を差して言うんだ。才能？容姿？性格に家柄、それにここぞと言うときに絶対に外れない運の強さ？

そんなものを持っていれば、さぞかしこの世は生き易いだろうと思う。打算を抱いて近付いて来る者もいれば、その人柄に惹かれて来る者も少なからずいるだろう。それ故、どちらかしか持たない者の持つ寂しさなんかとは無縁なのだろう。

カミサマって奴が本当にいるとしたら、寂しさを抱えて膝元に戻った愛し子を、まんまとあやして二度と手放さないに違いない。もしかしたら痘痕も笑窪、とこの世では虐げられるしかなかった奴だつて、早く手元に戻って欲しいカミサマが細工しているのかもしれない。そうだとしたら、カミサマの近くはいつも満員電車よりきつと混雑してる。

だから要らない奴からこの世に長く居座らせようとしているいなものを与えているに違いない。

そういう風に考えてしまえば、あいつは決してカミサマに愛されてなんていないと思えてしまうのだ。

あいつはみんなに好かれて、あいつもそれに答えて、そして僕は、あいつから逃げたくて。

別に、世を憐んでる訳じゃないから自殺だなんだと考えたことはない。ただあいつから離れられればそれでいい。

でもあいつは。そんなささやかな願い事しか持っていない僕なんかを決して離そうとはしてくれない。あいつに吊り合う物を何も持っていない僕は、必然あいつの取り巻きに虐げられる。

あいつもそれに気付いている。それでも止めないでいるのは、あいつが、僕にとっての唯一となることをずっと望んでいるからだ。

みんなに愛されるあいつ。みんな疎まれる僕。

それなら、カミサマにくらい、あいつより僕の方が好かれてるって思ったっていいじゃないか。

2
)

)
2
0
0
8
/
0
6
/
1

21-25 (前書き)

便宜上、はじめに数字を振っていますがそれぞれ独立しています。

21

ないておくれ、籠の鳥。

涙を知らぬこの身の代わりに。

お前がないてくれるなら、私は今一度あの御座に立つことも出来よう。

ないておくれ、私の青い鳥。

君を取り巻く幸運が君には決して向かないのなら。代わりに私が齎そう。

だから小鳥よ、どうかどうか、離れないで。

ある隣接し敵対した国があった。

嘗て交わした友好も時流と共に廃れていった。

残ったのは非情と政略に潰された小さき想い。

けれど二国は離れてはいけなかった。

大きな事物の核はとて小小さく、それ故軽んじられて灰に帰した。

二国は踏みにじった些事の眞実によって、温度のない歴記を残して闇に没した。

22

ハラハラと流れる涙はやがて顎をつたい

ほたりと溶けては重なって

やがて一つに交わり再び落ちて。

けれど、同じモノにはなりはせず。

2008/07/3

0)

23

私にはあなたが恐ろしくてならないのです。

今日はまだ覚えている。

けれど明日はもう忘れていくかもしれない。

今は辛うじて覚えているけれど、

数分後にはもう忘れてしまうかもしれない、その恐怖。

どれだけ感情を注いで書き残しても、この想いを正確に残すことはできないのです。

だから、ああ
だからこそ。

あなたは美しく、そして儂くあるのでしょうか。
その瞬きの優美細工は形無くとも壊れてしまつから。

突然の決別が、忘却の果ての潔さが。
私には恐ろしくてならないのです。

1)

(2008 / 07 / 3

24

ああ、あなたのその傲慢さに僕はいつも振り回され、精神はもう
限界を迎えている。

けれどあなたのその振る舞いこそが、あなたたるの魅力なのだ
知ったその時から、僕は不幸を嘆いている。

僕ではなく、その乏しさを。

あなたは持ち得ない涙でもって、代わりに僕が嘆いているのだ。

2)

(2008 / 08 / 0

25

私はあなたに理解して欲しいと願うのです。

訊けばあなたはわかっているよと微笑んでくれるけど、その眼にはなんの光も宿っていないことをあなたは知らないでしょう。

あなたは確かに私の幾許かを知っているかもしれないけれど、私は知るのではなく識って欲しいのです。

上辺だけの言葉になんの重みがありましたよ。

その内に入ってこそ、価値があるのではないのでしょうか。

私とあなたは何れ決別の時を迎えるかも知れませんが、けれどそれなら、私と言う存在があなたと一時でも道を交わした確かな事実を覚えていて欲しいのです。

(2008 / 08 / 0

4)

26・30(前書き)

便宜上、はじめに数字を振っていますがそれぞれ独立しています。

26

ずっと、私が守っていたと思うた。

あなたはあまりに小さくて、弱々しい出で立ちだったから。
その瞳を一杯に見開いて私を見上げてくれたあの日から、私は、
何をおいてもあなたを守ろうと、そう決めたの。

けれど、ごめんね。

守ってもらっていたのは私の方だったね。

あなたが支えになってくれたから、私は今ここに立っているんだ
よね。

あの日、あの瞬間から。

ごめんね。

だからためらってくれてたんだね。心配させてしまっていたんだ
よね。

でももう立つから。

安心して、行っておいで。

あなたがもう私の目には映らなくても、きっとあなたを感じるか
ら。

その時、ちゃんと誇れるように。

自分で立って、歩くから。

だから今だけ、

バイバイ

(2008 / 03 / 1

6)

27

「雨が降ってきたよ」

そう、控えめに語りかけても君は視線をどこかへ据えたまま動かない。

僕はそんな君を見ていらなくてもう一度同じ言葉をかける。

けれどやはり君は何の反応も返しはせず、居た堪れなくなった僕は思い切って指先で君の腕に触れた。

サア…と音を立てて振り出した雨粒が、その指に触れる。

ポツリ、ポツリと。瞬きの間を空けず君と僕を繋げる指から滴るけれど…。

僕は知っている。いや、本当は知らないのかもしれない。目の前で君の何かが砕けたのを僕は確かに覚えている。けれど、君の中で壊れたものがなんとと言う名前のものか、僕はきつと、一生をかけても識ることはできない。

「ねえ、雨が降ってきたよ」

君の視線は、相変わらず何処かへ向けられたまま。
降りしきる雨に遮られてすら据えられたままの君の視線の先を、
僕は知らない。

草木を打つ雨粒の音が大きくなる。

空から落ちた水滴は指先を濡らし、君のかんばせを濡らし。そして僕の胸をしとどに濡らす。

僕がどんなに願っても、この雨は止まない。

1)

(2008 / 08 / 2

28

もう、私にはその死を悼むこともできない。

私はもうその幸福に疲れ果てていて、それを維持することができなくなっただのだ。

…いや違う。できなくなっただのではなく、する気力がなくなっただのだ。

私が自覚を持ったとき、既にそれは皆に深く根付いていて、そうすることが当たり前だと皆が思い込んでいた。それが当然と思えなかった私が異物だということは未熟だった私でも難からず思い至り、どんな結末を呼ぶのかは更に容易く想像できた。

そして私は仮面を纏った。ひどく精密で精巧な仮面だ。

頑丈な仮面は常に笑みを纏い、その裏にどんな思いがあったのか、

私からすら覆い隠した。

積みもり積もった正誤の歪みは確実に私を蝕んでいた。その確かな痛みすら、仮面に包み守られた私には感じ取ることができなかつた。気付けば私は何もかもを感じ取ることができなくなっていた。

この仮面を被らねばならなくなつた私の思いも皆との相違も、全てが靄に覆われたようにあやふやになつた。

そうなつて気付いた。

はじめは皆、嘗ての私のような葛藤を抱いていたのだ。そしていつしか磨耗されたそれは新たなそれを生み出すことも、感じ取る昨日すらも麻痺させてきたのだらう。

それを皆はオトナニナルと言つのかもしれない。

私は、もうそれに対するいかなる考えも抱くことはなく、ただあるがままに流され感受するだけ。

もし私が、今日の前にいる子供のように明らかな反発を表していたら、今の私にも嘗てのそれが息衝いていただらうか。

想像はできる。けれど私にはもう、その感情の死を悼むことは出来ない。

(2008 / 09 / 0

8)

29

はい、と。そうだね、と。

そして時には微笑んで、あなたは肯定をくれるけれど、

どうしてそれが、私はかなしいのでしょうか。

みなと笑い合い、陽だまりの中で、とてもあたたかいとなみが成されているのに、

あなただけ、どうして別世界のように見えてしまうのか。

それはきつと、あなたの笑顔が貼り付けられた面のように温度のないものだから。

そう気づいた時、一人、あなたを見失う。

そしてまた一人、蛾のように引き寄せられていくのでしょうか。

あなたはさびしい人です。

けれど私たちも、まずしく、さびしい者たちなのです。

万人に向けられる無条件の笑みは壁のような無表情と同義だ。
その壁を突き崩さねばならないのは、外の側か、それとも内の側か。

(2008 / 10 / 1

5)

30

私のこの頬を伝うのは、涙などではありません。
これはひとえに
少しのたんぱく質と血と、苦しみの混じった
たんなる水です。

私は決して悲しみません。
私は常に貫くのです。

だから私は、涙などと まみえることはないのです。

2008/10/1

9)

31-35(前書き)

便宜上、はじめに数字を振っていますがそれぞれ独立しています。

男は叡智を求めた。

苦勞の末に、叡智に次ぐ知識を男は得た。

けれど男にはわからないことがあった。

そして男はすれ違う毎に質問を投げかけた。

男は聞いた。生きるとは何か、と。

あるものは影響を与えることだと言った。

生命活動を続けることで、他に影響を与えることなのだ。

あるものは影響を受けることだと言った。

過去、偉を成しえたものの残した遺産の恩恵に浴することだと。

あるものはそこにあることなのだと言った。

考えることもなく、ただあるがままに存在すること、と。

男には「生きる」がわからなかった。

男は聞き続けた。生きるとは何か。何か。何か…

男は、いつしかただ彷徨うものとなった。

それでも男は探し続けた。

己の求めたものすら忘れて、只管この世を彷徨っていた。

(2008 / 10 / 2

0)

3 2

いやだ！

この音が私を追いつめる。
一定で、断続的なくせに強く自身を主張する。

もう聞きたくないのにどうしても逃れられない、
中のオト。

私を私以上に知る、私の音。

(2008 / 11 / 0

2)

3 3

ああ、私は待っていたのです。
あなたがいらしてくれるのを。

けれど、あなたも待っていらしたのですね。
私が私ではなくなるのを。

構いません。連れて行ってくださいまし。
仄暗い、月明かりの世界へ。

) 2008/11/0

2)

34

…よく、わからないな。

見せてくれないか？

その手に、確かに存在するものがあるなら。

え？

大丈夫だよ、取ったりなんてしないさ。

それに簡単にとられてしまうようなものでもないだろう？

何？減る？

何をケチ臭いことを言ってるんだ君は。

それともこんな些細なことで減る程度のものなのかい？

いいかい。僕はそれが欲しいのではなく、ましてや羨んでるので
も嫉んでいるのでもない。

ただ知りたいんだ。

君らの崇拜する、その面倒で非効率的なそんなものに、本当に価

値があるのかどうか。

そんな不確かなものに依存してしまいたくなるほどの、何がその
存続を許しているのか。

僕はただそれが知りたいだけなんだ。

さあ手を開いてみるよ。

僕にその愚かで浅ましい熱を曝け出せるものならば。

(2008 / 11 / 0

2)

35

ねえ知ってる？

貴族って特権階級なんだって。

自分より下の人には何をしても許されるんだって。

たとえば慈悲をかけてオメグミってやつを与えるのも、その裏で
権も理も踏みにじってしまっても、おおっぴらに露見しなきゃあ許
されてしまっただって。

貴重な括りにいるってのに、えげつないものだね。

それとも、こんな蛮行を実行しても平気でいられる厚顔さが貴重
ってことなのかな？

ん？不敬だって？

どこに敬うべき人がいるって言うんだい？

僕の目の前にいるのは人なんかじゃなくて、理性を失くしたただ
のケダモノじゃないか。

4
)

)
2
0
0
8
/
1
2
/
2

36・40(前書き)

便宜上、はじめに数字を振っていますがそれぞれ独立しています。

36

俺はね、ペットなんだつて。

そう言われた時、心の底から納得した。

猫だとか、犬だとか、他の何でも構わないけど、そう言うのが好きな奴らは家で専用に愛でる用のを飼っていて、も道端の同族らよりも簡単にかわいがるだろ。

そんな風に、俺も愛でる対象のただ一つでしかないって、そう言われたんだ。俺には何より大切な奴の中で、俺は他の何かで代用のきく存在だと。

俺には一個体としての価値がないと。

それから俺と奴とは変わらぬ距離にいる。

俺は離れず。奴は揺蕩い。

けれど中身は…

俺は離れない。

一生を懸けてでも奴の中を俺でいっぱいにするために。

そして俺なしでいられなくなった時にこそ奴から離れるんだ。

それが俺にできる最高に些細な復讐。

…復讐なんて忘れるくらい、

なあ

俺だけを見ていて…

俺にはあんただけなんだよ、相棒。

1)

(2009 / 01 / 2

37

私は味方よ、て顔であたしを見るのをやめて
あんたの顔には偽善しか映っていないじゃない。

あたしは、あんたの自己満足のための道具じゃない。
頼むから、あたしに、あんたと同じことをさせないで。

あんたは気に食わないけど、あんたもあたしのための道具じゃないのよ。だから、あたしの欲求のための道具にさせないで。
あたしに、醜い八つ当たりなんてさせないで。

あんたと同じ自己陶醉なんて得られないけど、これ以上の自己嫌悪だつてあたしは欲しくないんだ。

8)

(2009 / 03 / 0

擦り切れたテープから流れるのは、とぎれとぎれの明るい歌声。
それが時折掠れるから、なんだかから元気な意地っぱりの歌のよ
うにも聞こえてくる。

今の僕の心境に、ぴったりだ。

だから僕は背を丸めて、一人機械に頂垂れる。

この歌を、誰かはいららないと言っただろう。
塵だ屑だ、時代遅れだと罵倒を浴びせて。

だけど、だから。

今日も、大切な愛しいテープに酔いしれる。

誰かなんて知らない。
誰かなんて知らない。
僕にはただ、これが必要なだけ。

(2009/03/2

1)

時々、ひどくこの身が邪魔になる。

何をしても、何をさせられても俺は他とは一線を画した存在でいた。そんな自分に、俺は少なからず酔っていたのだと思う。

見知らぬ者からの賛美、憧憬、そう言った好意を一身に受け止めるのが、俺には必要不可欠なものとなっていた。ほんの少しでも思う結果に障りがあれば、それを克服するために人知れず努力はしてきた。けれど、これまでの俺ではそんな面を誰かに知られるわけにはいかなかった。努力なんて地道な物、それを飛び越えていく俺に不似合いな言葉は他になかった。

そうして俺が俺を演じ続けた結果はいつも同じ、一点の曇りもない、晴れやかな日常があった。現状に満足し、上辺に囚われていた俺には見えないものがあると、どこかでは理解しながら、けれど俺はそれを見えぬふりをし続けていた。その時は既に、もう俺は俺を演じることで周囲との交流を持つすべを知らず、またその方法を手繰ることさえ困難な状況に陥っていたのだ。それは正しく自業自得だった。

そむけていた眼は、いずれ正面を見据えなければならなくなる時が来る。遅かれ早かれそれは必然。どれほど優れた、そう、神という存在であれ、きつと不可能なことだろう。

全寮制の高校へ進学した俺は、まずルームメイトの目をいかに？い潜って俺であり続けるかを模索した。学校へ居残るのは駄目だ。一人で何をしているか疑問を持たれるだろうし、誰かといえるなら本末転倒だ。部活という手も、誰も知らないマイナーな部への入部でもしなければ目的は達せないし、第一そんな部へ所属するのは俺ではない誰かだろう。素直に図書館にいればそれが一番だが、いかんせん、ルームメイトは図書委員に所属してしまったらしい。

考えた末に、俺は校外で家庭教師のアルバイトをする、という口実を使う事に決めた。これなら高速にも、外野への取りつくりも問題ないし、目的も障害なく達せられる。いざという時の口実ではあるが、土壇場でぼろを出さないためには有効な手段だ。

午後四時、放校。生徒が散りじりになる合間を縫い、二つ隣の駅近くにある公立図書館へ足を向けた。学校の図書館ほど使い勝手はよくないが、その代わりに様々な資料が並ぶ見知らぬ他人だらけの空間が心地よい。

途中本屋で物色してきた問題集を片づけていると、直ぐに門限時間になってしまう。けれどそんなことは俺であることをやめることに比べればちりのように軽い問題だ。

活気づく食堂を素通りし、顔見知りと軽口を交わしながら部屋へ戻るとルームメイトは既に夢の住人となっていた。掛け布団をはいで腹をむき出しにしたその間抜け面をみると落ちるため息を留める手立てはない。

風邪をひかれても迷惑だと布団へ手を伸ばすと、何の触れもなく勢いよく部屋のドアが開かれた。

その時、俺は俺じゃなくなる感覚を、生まれて初めて強制的に体験させられたのだ。

彼は衝撃的な人柄だった。

なんてことは全くなく、多少突っ走ってしまふタイプではあるが、根本的な所で平凡な、ごくありふれた、いわば凡人だった。

そんな彼に何故一瞬でも我を忘れてしまったのかは想像もしたくない。表面にこそ出さずにいたが、内心右往左往を繰り返しながら言葉を紡ぐ俺へ、彼は目を細めて笑みを返した。

その顔には愛嬌があつたが、それよりも一番惹きつけられたのは、瞳だ。

日本人は茶色い光彩を持つ者が多い中、彼のそれはうつすらと灰色がかつて見えた。その澄んだ瞳がこちらを向くと、俺はいてもた

つてもいられないような、不思議な焦燥に襲われた。

彼との接触は、その後たびたび起こった。部屋へ来たのはルームメイトに用事があったらしいが、どうやら友人というわけでもないようだ。けれどそれなら更に遠い位置にいるだろう俺と彼の接触する理由がわからない。校内で彼を見かけるたび、俺が彼か、どちらかが相手に気付き、そうなるかどうかともなくともに行動するにいたる。一緒にいる時の話題は他愛ないものばかりだったが、俺はその時間が他の多くのものよりも大切に思う割合が増えていつていることに気づいていた。

(未完)

(2009/03/2

4)

40

どうしてもいい分からないなら、いつそ放っておいてくれませんか？

あなたが、というより、目に映る誰かが僕の扱いに困って、どう接していいか分からないでいる、という状況を、僕は散々見てきましたから。その後あなたが取るだろう反応も、僕に見慣れた不快なものなのです。

困るなど言いません。戸惑うとも言いません。

だから気にしないでほしい、なんて意味のない言葉も口にしませ

ん。

あなたに知られてしまったのは、僕の非でもあるのでしょうか。互いに非があるなら、僕の要求だけを突き付ける気はありません。あなたが今後何を望むか、きつと想像は外れないと思うから、あなたがそれを口にする少し前に僕も僕の望みを言いましょう。

それまでの長くない期間だけでも、あなたが暴いてしまった僕の過去に：あなたが予想しなかった大事に苦しんでください。

それは、あなたがしでかした事に対してもたなければいけない、あなたの責任です。

いいえ。僕はあなたを恨んだりはしていません。人を呪わば穴二つ。僕は自分の墓穴を掘るほど奇特ではありませんので。

ただ、そうですね。世の中には己の勝手な予想を超えることが存外たくさんはびこっているという事を、知っては欲しいのです。

4 1 - 4 3 (前書き)

便宜上、はじめに数字を振っていますがそれぞれ独立しています。

4 1

細い指でそこをたどられると、くすぐったくてつい笑ってしまう。くすぐすと漏らす声の合間に、不公平だというつぶやきが落ちる。

「何が？」

「食べないわけじゃないのに、なんでこんな細いのかなって。こっちは食べなくても身になるのに、ずるい」

えい、とばかりにアバラを撫でていた指が、肉の薄いそこをつねる。

痛いよ、と言うと、もっと肉をつければ痛くないよと返ってくる。そんなことを言われても、体質なのだからしょうがない。それに、己でもこんな体ではいざという時に困るだろうといっただって思っている。

もし、君が私の前から消えたら、私は満足に探し歩くこともできないかもしれない。

もし、何事かあつて君に危険がせまっても、薄い体では盾にもならないかもしれない。

もし、食料のない無人島へ立ったとして、死した私を君の中に生かしてもらおう事も出来ない。

気づくと君は、私から少し離れた海際に立って、そのなだらかな線を惜しげなくさらしていた。

もし、私が君のようだったら、君の指が私に触れることもなかったかもしれない。

だとしたら、私はこの体を持っていたことこそ幸運だったろう。

夏はまだ遠い低い太陽の下で、私たちはしばし無言で赤々しい太

陽の最期を見届けた。

(2 0 0 9 / 0 3 / 3

0)

4 2

手を頭上に透かしてみれば、目を引くのは真つ赤な血潮ではなく、細く絞られた楕円の腕に一筋通った白い皮膚だ。

嘘のように白いそこはもう黒い体液を零すことはないけれど、衝動的にかきむしったせいでぼつぼつと内出血の跡が水玉のような模様を作っている。七分の袖に隠れた肌にはもつとあからさまな赤紫が浮いていることだろう。

ワカゲノイタリで引いた白線はまるであの時紅に覆われる前に見た皮膚の内側に似ている。けれどそれは似ているだけ。今日にしているのは似て非なる、そう、新しく生まれ変わった肌だ。

他よりも新しいそこは初々しく、他より顕著に刺激を受けたことを主張する。私はそれが見たくて時折こうやって、新しい私をいじめてみるのだ。

ああ、もしかしたらあれもそう言うことだったのかもしれない。肯定することは今でもできないけれど、あれはあの人にとっても抑えがたい衝動だったのかもしれない。同じモノなのにだから浮き出ているように見えたのが、かつての私だったのだ。

私はただ、目をむけた先に居てしまっただけの存在。

白く残った一線にもう片方の手指で触れ手そつと撫でる。

ごめんね。

何も悪くはなかったのに、ひどいことをしたね。

腕と一緒に心を切り付けたその後しばらく、私は傷と同じく私自身も人目に触れないところへ隠した。けれど今は、堂々とはなくても人ごみの一員として我が身を曝す。

もう二度と、嫌だと思った心はもうここにはない。それは古い皮膚と一緒に捨ててしまった。

今はただ、非なくして傷つけてしまった傷を労わりながら歩く。

どんなに苦しくとも、傷は癒えるということを私は、私とその他の一人から学び取ったのだから。

2)

(2009 / 07 / 0

43

「なあ、丸と好きとムシ、どれがいい？」

「あ？何それ」

「ど・れ・が・い・い・？」

「…じゃあ昆虫で」

そう言った途端、奴は世にも哀れな物を見るような同情しきった眼差しを向けてきた。

「…なんだよ」

「安芸がそんな奴だったなんて僕、思わなかった…！」

「なんだよそれ？俺は訊かれたからこた」

「虫さんを食べるなんて、安芸なんてどっか行っちゃえーっ」

「誰が食うかそんなもんっ！ー！」

よくよく訊くと、どの焼きが好きかの質問だったらしい。

って、わかる訳ないだろこの虫博士め！ー！

2008/03/2

9

44 (前書き)

繋がりのある3つの会話コメディ。

叔父と姪っ子

01

「あれは鳶、あつちが魚、それと…」

「鳶じゃなくて木、と言っか森だあれは。あそこは魚じゃなくて湖だ」

「あつ 犬！」

「ツギヤー！バカ逃げろー！！」

場違いにキヤツキヤと騒ぐ姪。

何で俺がこんなところでこんなことをせにゃならんのだ！

何？カリカリしてるって？

こうでも言ってなきやこんな状況やってられるか！

俺の数メートル後ろには狼の群がいるんだぞー！！

ああ、俺、こんな秘境で死ぬかもしれない…

(2008/03/2

9)

02

「さとうにミルクにチョコッコレートっ」

「どうしたんだそれ」

「どれから食べようかなー。とかしてぜーんぶ食べちゃいたいなあ」

「…。どんな大食漢だお前は」

「違うもん。僕より食いしん坊さんいるもん」

「ッだからどーしてお前は言うのが遅いんだーっ!」

というか、歩く食虫植物なんて反則だろ!

とか思っているうちにギャー蔓絡まった助けてー!!

(2008/05/1

5)

03

「エへへへへー」

「なんだ気持ち悪い」

「オージサンっ」

「?」

ボト

「わーいひっかかったひっかかったー!」

どうやってこんな深い穴を掘ったんだかはどうでもいい。

下の方からこの世のものとも思えない奇声が聞こえてくるのも今はどうでもいい。…怖いから。

咄嗟に穴の淵を掴んだのも瞬時に身の危険を感じた俺の生存本能だろうからとにかくそんなものはどうでもいい！

誰か！俺の肩の上で飛び跳ねてるコイツを！どーにかしてくれ！！

) 2008/08/0

1)

45 (前書き)

繋がりのある3つの会話コメディ。

「覚悟はいいか隊員！」

「はい、隊長！」

「よし！突撃するぞ隊員！」

「はい！隊長！！！」

「うおおおおお！！！」

「ぎゃああああ！！！」

「ほ、報告を…隊員！」

「はい…無事目標物確保であります、隊長…！」

「で…でかした隊員…。これで思い残すことはない…（ガク）」

「た、隊長ー！！せっかく買ったチヨコレート、渡す前に死なないで下さいよー！！！」

冬の寒さの中の、ホットな日のことであった。

「準備はいいか、昔は隊長今隊員！」

「はい、昔は隊員今隊長！」

「よし！任務の前に伝えておくことがあるぞ（前略）隊員！」

「はい、（前略）隊長！」

「前回の任務の過酷さから学んで、今回は助っ人を読んであるぞ隊

員！面倒なので前略は以下省略だ隊員！」

「ま、真でありますか隊長！」

「うむ。可愛い隊員のために前回ののような酷な計画は避けるのが隊長たる者の役目だ！」

「…」

「紹介する。人込み掻き分け歴ざつとゴツファー！」

「た、隊長ー！」

「余計な事言わなくていいのよこの大根」

「し、失礼した（さすさす）」

「うう、おいたわしや隊長…。こんなにでかいこぶが…（さすさす）」

「

「人込み掻き分け術のレクチャーでしょ？そんなのガーツと行ってバーツとすつ飛ばして突き進めばいいのよわかった？」

「了解であります！（ステレオ）」

「じゃあ行くわよ野郎ども！」

「は、はい！特攻隊長ー！」

「ぎゃあああああー！！！」

「くっ、手を放すな隊員んんんんん！！！」

「た、隊長おおおおおおお！！！」

「だ、だいじょうぶ、か…たい、たいいん…！」

「…っ、……………は、…はい、たいちよ…う…！」

「では…ほうこく…を…（バタ）」

「はっ…にんむ、かんりようであり…ま…（バタ）」

「改善点はあんたたちの体力のなさの補強、って言ったところね」

春まだ遠いその地には一糸乱れぬ特攻隊長と物言わぬ屍のような上司部下が横たわっていた。

後日、ある二人の二コマ

「それにしても、仕返しをするのに共倒れするところが抜けてるわよね、あんた」

「う…申し開きのしようも…。ところで、あのワゴンに群がってた大量の人たちはなんだったの？」

「あああれ。エキストラ」

「…」

「バレンタインにあれだけ苦労してブツを？ぎ取ってやってるのに、お返しが簡単に手に入るって癪じゃない」

「…チヨコみたいに限定されてないからってのもあるけど…、ムサイ男が大量に集まって黄色い声出してキャンディとか取り合ってたら視界の暴力じゃない？」

「あんたも言うわね」

「いえいえ、お代官様ほどでは」

(2009 / 06 / 2

3)

01：傷痕の世界

世界は傷痕のようだ。

たとえば肌に刃を走らせて、血をまぶしたあと必ず周りが勝手にその傷を埋めるように。

けれど決して今までと同じモノではないように。

傷痕の世界は不毛の地になり、私たちには都合が悪いモノになる。

私たちは凶器として此の世を傷つけながら、素知らぬ顔で此の世に息衝く。

世界は・・・滅びを待っている。

凶器を産み落とし、自らを傷付けさせ、永い命を終えたがっている。

孤独に生まれ、永きを自らを慰めることに費やし、

それでも続く果てなく流れゆくときの流れに怯えるゆえに。

世界は滅びたがっている。

自ら産み出した、私たち”凶器”と言う名の子供たちと一緒に。

孤独で生まれ、再び孤独で死ぬことに怯え抗うために。

凶器よ、母と共に滅びへの途筋をたどれ。

01：傷痕の世界（後書き）

これは創作世界の描写…ではなく、なんとなく抱いている私がこの世界に持っているイメージです。

なんて書くと危ない奴とかいわれそうですね。

けど、46億年以上生きてきた地球が食いつぶされ始めたのは、紛れもなく人類が誕生してからだし。

他の考え方もいくらでも出来るけど、これを思いついたときに一番強く感じたのがこのイメージだったんでしよう。

文字通り世迷言ですが

02：価値

私が生きている意味って何だろう

私が死んだら誰か泣いてくれるだろうか

誰かに泣いてもらうために私の生は在るのだろうか

自分以外のナニカを主体にすることでしか私の価値は見出せないのか

人に与えられるもの以外 私の価値はないのだろうか

そんな私なんていらぬ 欲しくない 斬り刻んで棄ててしまいたい

だから、自分で自分の価値を作って、見つけて ずっと生こう

前向きなんだか後ろ向きなんだかいまいち判らない世迷言。

でもこういった心中の葛藤は思春期の頃、誰でも持ったことがあると思うのですが、どうでしょう？

女子なんかは特に学校という限られた空間の中、限定された人たちの中で立ち回ることが煩わしいと思ったことはありませんか？

自分というのは勿論自分のために存在するものなのに、集団の中にあらねば存在を認知されない。

当たり前なんだけど心底厭になったことが私にはありました。
それでもそれを経験して立ち回る術を覚えたからこそ今こうしてこ
こに私はいるのですが、世に擦れて汚れてしまった気もします。
そんな自分も受け入れて認めて上げられたら、と思う言葉が集まっ
た世迷言でした。

03・思い出して

僕を見て

僕を見て。

ねえ、そんな顔しないで。

君はあんなによく笑っていたじゃない。

ねえ、そんな事いわないで。

君は誰よりやさしかったじゃない。

ねえ、気付いて。

傷ついているのは君だよ。

泣いているのは、君なんだよ。

さあ、顔をあげて。

君の目の前に何が見える？

大丈夫、怖くないよ。

勇気を出して、足を踏みだして。

君の前に、僕は見えないけど。

君は一人じゃないから。

君が大人になっても

僕はずっと

君の中にいるから。

大人になるにつれて、薄れたり、忘れるものってなんだと思いますか？

私は、それは子供の頃当たり前のように思っていた、何かをまっすぐに感じる方法だと思います。

成長するにつれて世の中のいろんなものに当てられて、何かをそのままに受け止めることが難しくなってくると常々思います。

いろんな判断を下せるようになる代わりに失うものの一つですね。

だからこそ、子供の頃は誰でも純粹なのと同時に、残酷でもあるのかな。

何かを善や悪と判断できない子供は時に残酷。無知ゆえに無邪気。だからこそ純粹。

そういうのを全部含めて子供は天使だとか言う比喻が生まれたんでしょうか。

なんて、また何やら文字通りの世迷言になってきましたね。

これを見て、誰かの心に何かを作用させることができたでしょうか。皆さん、子供の頃の自分。覚えてますか？

04：独双

俺に死んでと ハジメテ呟いてくれた。

今までずっとキミを支え、護り、慈しんできた。けど

それがまやかしたと気付かせてくれたのもキミ。

俺は、嬉しかったんだよ。

キミが俺に気付いてくれて。

”俺”という命を認めてくれたことが、どれだけ救いになったことがキミにはワカラナイだろうけど。

…いいんだ。わからないでいて？

そのままのキミで。

今のキミが、俺の望んでいた、待っていた、逢いたかったキミだから。

俺を殺すのはキミ。

キミを”キミ”にしたのは俺。

それだけで俺は満足だった。

キミと逢えてよかった。

04：独双（後書き）

二重人格者の副人格が消えていく瞬間ってどんなだろうと思いがながら綴ったもの。

多分にこの人は主人格（おそらく）をかけがえのない存在と認識していた模様。

副人格って主人格の精神を護るためにできるって聞きましたが、関係が良好なものばかりでもないようです。

私には想像する事しかできないのですが、それは庇護というものを本人の深いところでどう思っているかというのじゃないかと勝手に考えています。

彼を生み出した子は、幸福を幸福として素直に受け取ることのできる貴重な子だったんじゃないかと思えます。

05：時稀

私は水を汲んでいた
水を撒いて 畑を耕して
稲麦芋蓮葱人参
様々な糧を得た

私は糸を紡いでいた
綿花を育て 夜を徹して
糸車の音を響かせた

今

私は糧を育てない
どこからも糸車の軋みは聞こえてこない

キシキシキシキシ軋むのは私の心

あの時の誰が想像できただろう
私たちの苦勞がこんな…

あの時
あの実を食べずにいたのなら
こんな現実には知らずにすんだのに
あの男にさえ会わなければ
こんな苦痛は識らずにすんだのに

私が今 生きる糧とするものは
あの男を捜し出す事

あの男を捜し出さなければ
死ぬ事さえ儘ならないのだから

05：時稀（後書き）

いつもの世迷言とはちょっと違う雰囲気。物語を含む文字列。

今の時代、適度に働いてさえいれば食うに困らず生活できます。余暇だって作るうと思えば作れます。趣味だっていくらでも持てます。けど昔は働き続けなければ食うことも生活することもできなかつた人が殆どだつたんじゃないかと思えます。

今でもそんな人はいますけど今とは桁違いに多く。

そんな暮らししか知らない人が今を見たらどう思うのかな、と考えるうちこれを思いつきました。

しかも元凶となる人付きで。

この人の運命は八百比丘尼と似通つたものでしょう。

06：オモイ

あふれだす このオモイは
とても醜い

恨んで 泣いて 罵って
また、泣いて

泣いて
泣いて
泣き続けて

涙で世界が枯れてもまだ
粉々に 支えが崩れてしまっても

それでもきつと

あなたをオモウことを
諦められない私を 思い知らされる

恋でも憎悪でも、その人を強く思うことに変わりはないと思います。
とっては語弊がありますか。
言い換えるなら、自分以外の誰かが自分に影響を与えらるという点に

おいて、恋や憎悪には差がない様に思えます。
ポジティブな感情かネガティブな感情かのみが違うだけで後は構造的には同じ事。

だからきつとたどり着く先も同じなのだと思います。純粹の先には無償のものがあると思っています。

恋の先には愛が、憎悪の先には殺意が。

両方とも自分の利益には関係ないところは同じだと考えるのは異常でしょうか。ポジティブに向かうか、ネガティブに向かうかは薄い壁を隔てるだけの紙一重のことなのでしょう。

とまあ、しちめんどくさく言ってみただけど結局言いたいのは人の感情って難しいよねってこと。

07：言の破

勘違いしないで

君は此の世で独人きりなんだ

どんなに心寄せる人がいようと

どんなに想い合っつていようと

本当に傍に居る存在なんて居やしないんだ

ねえ、わかるでしょ？

このスガタが

ねえ、聴こえるでしょう？

この、嘆きさざめく懐中の絶望が

君が独人で無くなる刻

それは君が此処に在る限りありえないんだ

だってそれは

君が

こちら側に来た証なのだから

言葉って不思議ですよ

内包する意図によって同じ言葉なのに全然違う方向に作用したり、

受け取る側によって無意識の故意によって意味が変わったり
純粹に真っ直ぐ伝えたい言葉を、相手にそれ以外の意味では伝わら
ないような言葉って言うのも無いし、
やっぱり言葉って奥が深くて魅力的です

08：不関不動

そんなこと言っても無駄だよ

貴方がどんなに繕ったって

真実は変わらない

どんなに想ったって

簡単に変えられるほど摂理は甘くない

さあ 考えてご覧

貴方の心には何がある？

フフ わからないかな？

貴方の心にあるもの

それは…

ねえわかったでしょう？

貴方は

うつん人間種がどんなに深く

傲慢なのが

貴方は 生を受けた瞬間から

これ以上無い呪縛を受けているんだと…

幾分当初の予定より抽象的になってしまった。

まるで呪いの言葉のようですね。明るみにいるとは言い難い人を更に深く暗闇に墜とすみたいな。

人は自分のためにしか泣けないと聞いたことがあります。

例え誰か大切な方を失って零した涙でさえも、悲しんでいる自分が可哀相で泣いているにすぎないとか。

聞いたときは簡単には違うと言いきる根拠がありませんでした。正直今も確証は無いです。

涙が何故流れるのかと言う点で考えるとますます否定できなくて、これはその悶々とした気持ちが生じた文字列です。

09：負荷相伝

此の滴る朱は

大地に染み入り継えてしまうの？

指も 髪も

紅い空と黒い途を映した此の目玉さえ

其れを納めた眼窩でさえも

塵屑となって礎の身に還るのならば

どうかどうか燃やし尽くして

此の身が再び返らぬように

私が再び害さぬように

どうかどうか

此の身が再び犯さぬように

意図せず再び汚さぬように

どうか

動物に限らず植物に限らず、形あるものはいずれ土になって次代の形あるものへの礎になっていくんですよね。

それはとつても前向きな言い方だけど、悪影響のあるものも否応なく伝わっちゃうんですよね…

逆にいうと、とてもとても素晴らしかったものを礎にしてとても愚劣で哀しいものができてしまうことも勿論あるってことで。それならいつそ形を残さず消えてしまいたいと思うのは物凄く後ろ向きな思考なんでしょう^^；

まあ、来年のことすら鬼に笑われてしまうというのにそれ以上先のことを言うなんて誰に笑われるかもしれない世迷言なんですけどね！

10：逃避に非ず

あなたには感謝しています。

それでも、尊敬することはどうしてもできないのです。

あなたは私に十分な食事と、棲佳と、生活をお与え下さいました。世間で言われる所の責任を確かに果たしていると、未熟な私にも思えます。

けれど、その陰であの方がどれ程苦心されていたか、

あなたはご存じないでしょう？

あなたが話す、ご自分の如何に優れんかのお話に、

醜悪なばかりの自尊心、己惚れ、他者への無意識の侮蔑が

確かに含まれているのに、今を以ってもお気づきにはなられないの
でしょうね。

それにあなたはご自分にとても素直でいらしたわ。

私が口答えをした時、あなたは口が開かなくなるほど私の頬を張り
ましたね。

そんなあなたから目を背けた私のこめかみを、あらん限りのお力で
殴られましたね。

あなたは他者を貶める方、貶められる側では耐えられないのですも
の。

私が全ての諸悪の源に見えてしまわれるのですね。

でも…考えて御覧なさいまし？

この顔を周りの方がご覧になられた時、あなたがどのようなことを
なされたのか

隠しようもなく知られてしまうと思われませんか？

その人のものではないような雄叫び声が、この薄い壁を越えてさぞや響いていることがお分かりにならないのですか？

これが明るみに晒された時、あなたはきっと醜くも無意味な弁解を辺りに垂れ流すことでしょうかね。

ああ、けれど。

今のあなたにはきっと私の言葉は油のような可燃性を秘めていることでしょう。

だから私は黙って参ることに致します。

この腫れ上がった瞼も

元は白かったこの頬も

どす黒く歪んでしまったこの口唇も

伸びやかとはいえないこの手足も何もかも。

全て持って消え行きます。

××××様

私は、あなたのことを心より愛しておりましたのよ。

だから、私のたった一つのこの体躯は

決してあなたに支配などさせない。

私の居ぬ世で 苦しみもがき 報いを受けられんことを…

すさまじく後ろ向きな、皮肉と呪詛の入り混じった言葉ですね。病んでますよ、語り部さん（汗）

でも、病んでるっていうのを自覚するのには健康な状態がどんなものかを知らなければいけないのですよね。

自分の置かれた状況が全てと感じてしまう種族としては、比較できるものがなければ普通と言うのがどんなものか、統計すら出せないものだと思っています。

おかげで知識なんかは豊かになるのだろうけれど、代わりにそれに囚われて自分の意識の幅が限定されてしまう、など何らかの制限を受けてしまうのじゃないかとも思います。

話が逸れましたね。

ええと、その比較をするのに必要なのは、それまでの自分の経験が根本にあつて、幼い頃感じたことや学んだことが自分の判断の基準を司るものだと思うのですが、例えばそれが歪んでしまっていたらどうなるのかと思って書きました。

歪んだ根底を植え付けられた人が成長して普通を学んだら。きっとその狭間でひずんで、心が悲鳴を上げて、拳句壊れてしまうのじゃないかな。

勿論それが全てではないけれども、全ての中の一つでは無いかと傲慢にも考えいます。

一度歪んでしまった心は治るのか。世迷言にすらなら無い戯言ですが、今考えるのはそればかりです。

11：氣害

わたしは今 大きな古木の下にいる

古木の下で 降りしきる雨から身を避けている

好奇心にかられて ほんの一時体を雨にさらしてみた

雨は強くて

とても強く降りつけて わたしの体に穴を開けた

そうしていつしか 古木の下以外にはいられなくなった

永い永い間

痛みを引き摺って 古木の下から出なかった

時は過ぎていつしか古木は枯れていく

わたしの体も古木の下にはいられない程育っていった

雨は止まない

わたしは 雨に打たれて傷を負う

その確たる覚悟を決めねばならない…

逃れられないものと言うのは誰にでもあるもので。

覚悟を決めて潔く立ち向かう人、目を逸らして逃げ続ける人、もしくはそれと知らない内にその中に身を置いている人もいるかもしれない。そんなことを思いつつ、それでも逃げ続けられないものもやっぱりあるもので。

どれが良いどれが悪いと決めてかかるつもりは無いけども、自分にとっての最良と、その時の選択が必ずしも一致しないこともありますよね。それを考えると後悔するのが目に見えて、更に選択を延ばして最良を逃してしまうような事も、やっぱりあります。

時間は遡る事ができないのだから、後の選択で悔やむよりも今の選択で悔やむ方がきつと選べる道も多いのではないかと思うのに、なかなか踏ん切りがつかないで時間がたってしまうて…なんてことの繰り返しです。

理想なんてものは所詮絵空事だとヤサグれたりもします。でもいつか、最良の形ではなくとも、後悔の少ない選択ができればいいなんて。そんな埒も無い世迷言です。

12：残凝

ポツリ

滴はしたたり堕ちて

ジワリ

ひずむ下地は染められて

プカリ

浮かぶ泡屑は灯を遠ざける

残るのは ただ
報われぬ憧憬のゆめ

与えられたのならそれと同じだけを返さなければいろんなモノがバ
ランスを失って。

堕ちてきたのが重いモノなら軽いモノを、与えられたのが暗いモノ
なら光を吸い取られてしまふのじゃないかと思いません。

それが強制であれ自発的であれ、似通ったモノの塊がいくつもでき
ていて。

その塊がより合わさったものが誰かに向ける感情であったり、向けられる何かであったりと感じることはありません。

… 明るいものばかりでも、暗いものだけでもないからこそ複雑なモノ。
… やっぱり完全に理解できないものをはっきりと形にすることはできないものですね。

13：痕釜

言刃^{コトバ}が

ワタシを疵付ける

窪んだ心を埋めるのは

寂寥、嫉妬、羨望…

それとも罪悪感？

治らない傷はないけれど
元には戻らない疵はある

傷だって以前と同じ物ではないというのに
窪みに埋まった数々が

与え齎^{ジガ}す似我とはどんなモノ…？

言葉関連の2つ目の世迷言ですね。造語が多くて読み辛くて申し訳
ないです。

人に向けて放ったものも勿論、悪意や反射的に放った咄嗟の心無い
言葉は自分にも多大な影響を与えるものだと思います。

それが何気ない一言であっても、振り返って考えたときに「なんて酷い言葉だっただろう」とか「どうしてあんな事を」とか、行き着く言葉は違えども自己嫌悪する経験は多分誰にでもあるのではないかと勝手に思っています。

相手との意思疎通のためにある言葉だからこそ、間違った使用をしたときの自分への影響もやはり少しではすまないのかな、と。

14：伝えたいコト

綺麗だけでできたニンゲンなんていないよ
綺麗なだけならそんなのは人形だけで事足りる

ぶつけるだけが術ではないよ
そんなの、空から落ちてくる汚濁交じりの雨がやってる

在るためなのなら

いくらでも迷って、傷ついて、そして吐き出せばいい

ただ存る事なら小石で代わる
欲するのはただ強くあること

いずれはそれが、蓄を醒ます

捻りも何もなく、ただタイトルの通りです。
私が一方的に思って、けども伝えられないでいること。
これを言うにはあまりにも若輩過ぎる自分を自覚しています。
いつか堂々とと言える自分になりたいと思います。

15：惹力

そこにあるだけが価値ではない
そこに何があるかが価値を決めるんだ

初めて見たときはただただ圧倒された
次に見たときは感嘆した
そしてその次に見たときは…ただの一片も揺さぶられるものが無かった

そんなものだ
何もかもそんなものでしかない

そう思っているとき出逢ったそれは私を驚掴んで離さなかった
それから数百年が経ち
それでも私は、それに囚われたままにいる

ああ、これが本物の……

一度だけ見た巨匠たちのそのままの作品は、画集なんかで見るものとは全くちがくてただただ圧倒されるばかりでした。

人の目が無ければ全身が痺れるようなあの不可解な力に負けて泣いていただろうと今でも思います。
そんな作品たちを磨耗するほど思い起こしても薄れないそれは、やはり本物なのだろうと思います。

「……」
「ねえ」

「……」
「ねえってば」

「……」 シスコン
「……」
「喧しい！」

ようやく振り返ったそいつの目は、想像通り盛大に潤んでいた。でも、それを絶対に零すまいとしているってことは、彫刻刀で彫ったみたいな深い眉間を見れば明らかだった。そうやって強がるから、俺はお前を放っておいてやれないんだって、いい加減長い付き合いなのに気付きもない。

「シスコン」

「……」 煩い

「あまえた」

「……」 訂正しろ、莫迦

「寂しがり？」

「……」 そうかもな

「おや素直なこと」

「娘が嫁に行くってこんな感じかも」

「……」
「……」

「……」 それ、二回り上の姉貴に対する言葉じゃないよ

思わずそう言ったら、人それぞれだと言って叩かれた。

まあ、やつあたりできるまで回復したんなら、それはそれでいいけどね。

01(後書き)

2007/08/03

「お前さあ」

「なんだよ」

「これからどうすんの」

「……………どうって何が？」

ホントに、何が”どう”なのかわからなくて訊き返したただけなのに、向けられた顔は怒ってるみたいで、俺の返事が皮肉か何かだと取られたらしいとわかった。

そんな反応をされて嬉しいはずもなく俺もムツとした顔をしてやったら呆れたみたく溜息を吐かれた。

たいがい失礼な奴だ。

「だから、お前姉ちゃんどこに居候するの？引越し先とか聞いてないけど、そのまま今の家に住むのか？」

「……………はあ？」

「お前ソリが合わないからって相手いじめてやるなよ」

「うちに一人で住むに決まってるじゃん」

何言ってるんだ、って加えてやったらバカみたいに口開けてやがる。こいつのこんな顔みたのなんて、どれくらいぶりだか覚えてすらなくて、何だかむしろように笑えてくる。

「…だってお前、家庭科室で伝説作ったのに……………、正気か!？」
「俺は過去を振り返らない男になるんだ」

そう言ってるやると、口に加えて目まで空けたままじいじいじいと俺を見てくる。

目、閉じないで痛くならないのかな。

02(後書き)

2007/08/04

おそろおそろ伸ばした指が呼び鈴に届くと、今の俺の心境とは全く逆のかるーい音になる。

出て来て欲しい。

でも、ドアを開けて欲しくない。

背中合わせのようで忠実に言い表すならこうとしか言えない心境だ。

暫くたっても何の反応もない。念のために、もう一度鈴を鳴らしても同じ反応。

「……………はあ」

思わず溜息をついて覚悟を決め、俺は異臭の充満しているであろう魔境への扉に手を伸ばした。

「大体、どうやってたらこんな匂いが作れるんだか。……………ある意味才能だよ奈鶴」

案の定倒れていた幼馴染の横に中身の詰まったスポーツバッグをどざりと置いて、幼馴染を肩に担いだ。

03(後書)

2007/08/06

「なあ」

「……………」

「なあっ！」

「駄目」

「ここ俺んちなんだけど！」

「住める状態に戻してやったのは俺だよ」

「頼んでないし！」

勝手に押し付けるな、って続けようとしたらいきなりポカって頭をたたかれた。

「なにすんだよ！」

「……………」

「無視すんな！」

「……………」

こ、このおっつ！

あつたまに來たので思わず手に持ってたモノを投げつけて、階段へ走り出す。

「貴夜のわかどしよりー！」

「っ待てコラ莫迦奈鶴ー！！！」

よくわからない色に染まった雑巾を被ってユラーっと立ち上がった貴夜があんまり不気味だったから、俺は死に物狂いでそこから逃げ出した。

04(後書き)

2007/08/07

奈鶴は食べ物をやると大人しくなる。

いや、正しく言うならうまい食べ物をやると大人しくなる。

「ゲホツかは、……ケホケホ……っ！」

更に正確に言うと、うまい食べ物を与えないと大変にやかましい。

「……っ……！ゼーゼー………」

長年そう思ってきたのだが、どうやらそうとも限らないらしい……

「っなんだよこれ！」

「何が？」

「これだよこれ！ジャムかと思ったたらこんな……。とにかくなんだよこれは！俺を殺す気か！？」

と思っただが、やはり静かなのは最初だけのようだ。

残念なような諦めたような、そんな心境が顔に出ていたのか、本気で聞いていないように見えたのだろう俺に、奈鶴はこんなもの食べ物じゃないとか、一瞬河が見えた、だとかと猛烈な勢いで抗議をはじめめる。

が。

「それな」

「なんだよっ！」

「お前の遺物」

「……は！？」

「だから、昨日お前がどうやってか作って、俺が抹殺したモノの、鍋にこびりついてた残骸」

「……………」
「……………」

意味を徐々に飲み込んでいく様が傍目からでもこれほどわかりやすいのは、俺の知る限りだんつつコイツが一番だ。

「もう台所に近付くなよ」

「……………うん」

良い返事を返した奈鶴にヨクデキマシタとニッコリ笑って頭を撫でてやる。

これでようやく、温度下降と共にウニヨ〜っと縮む謎の物体を処理することから解放されると思うと、一日中でもいい子いい子していてやりたいとすら思ったのだった。

05(後書)

2007/08/08

「俺はそんなもん頼んでない」

「似たようなものでしょ」

「ぜんっぜん違う!」

「これしかなかったんだから仕方ないだろ?」

「……………」

「奈鶴」

至極全うだと思われる俺の意見を、奈鶴は見事なまでにしかとしてくる。

「何が違うんだか、俺にはわからないよ…」

溜息と一緒に思わず漏れた本音が聞こえてしまったらしく、奈鶴は

「俺が甘いのが好きだって知ってるだろ!」

思いつきりそれはもうでかい声で抗議してきた。

そんなに違うものかなあ。

ゼロもネックスも、俺にはどっちも甘く感じる。

06(後書き)

2007/10/13

…ああ。

一体どこで育て方を間違えたんだろう……

07(後書き)

2008/03/14

「貴夜貴夜、お前犬派？猫派？」

「なに？いきなり。奈鶴こそどっちなの」

「俺はねー、犬派！」

「……………」

「だって犬は猫より強いじゃん！」

「……………そんな理由だと思った」

「それより貴夜はどっちなんだよっ？」

「知ってるかい奈鶴。猫は猫科だけど、犬は猫目犬科犬属なんだよ」

「……………あ？」

「犬の方が猫に分類されんだよ。じゃあ本当に犬の方が強いって言えるのかな？ねえ奈鶴？」

「え？えーと……………え？」

頭を抱えて悶々とした奈鶴を放置して、中断した作業を再開する。

少しは悩んで大人しくしていればいいんだ。

この前約束したばかりなのに、またもや独創過ぎる珍品を作るだなんて。いい加減に自分の料理の才能のなさを認めて欲しいものと溜息が出るのを止められない。

08 (後書き)

犬はネコ目犬科犬属。

ネコ目とは脊椎動物亜門・哺乳綱(噛み砕いて言うと背骨のある動物の内の、哺乳類を指す言葉)に属する動物の分類単位。食肉目、食肉類ともいう。(wikipediaより)

2008/03/31

「あ、流れ星」

「え？」

「だから流れ…ほらまた！」

そう言っつて両手を組んで一心にお祈りする姿がとても可愛らしく見える。

「…何お願いしてるの？」

「こづいつのつて言っっちゃったら叶わないから、言わない」

「言わなくても叶わないけど、言ってくれたら叶うかもしれないよ。ほらほら言っっちゃえ」

「……………それ、間違っつてもガキの前で言っっちゃだめだよ」

「つて、もう遅いじゃない、それ」

「？」

「わかんないならいいよ」

それはさて置き、星なんかに願ったことを聞き出し、私の手で確実に叶えてやるべく願い事を力尽くで聞き出す。

ほんのりと抵抗を見せるも、数分の攻防の末、「怒らないでね」と言っつ前置きを経て口を割らせることに成功した。

「…あのね。姉ちゃんの料理が美味しくなりますよっつて」

「……………」

ああ、可愛い弟よ。

お前が望むのならばその願い、叶えてやるっつじゃないか。

翌日から味の強い…味覚を麻痺させることが目的の料理をひとつきに渡り奈鶴に食べさせ続けた。

ex01 (後書き)

味がわからなければ美味いも不味いもないと言っ…
なんと言うアバウトな姉ちゃんなんだ。
因みに味覚麻痺は治っても、料理下手はしっかり受け継がれていま
す。

2008/03/31

01 (前書き)

この作品は「rewordite」(<http://lonelylion.nobody.jp/>)の「疑う五題」をお借りして作成しております。

-それは誰に触れた唇ですか-

「だからさ、何でそんなことですかねられなきゃいけないのか手聞してるんだよ」

背後で聞えよがしな溜息とともに、心底うんざりした声が聞こえる。

けれどそれに言葉を返すことも、態度で何かを示すこともせずにいると、うんざりした様子にさらにイライラとした様子が混ざる。それでも、俺は何の反応も返さない。

「じゃあ、お前は何か。俺にケイと遊ぶなっての？視線も合わないで、手も触れないで、二度と会うなっての？」

ふざけんな、と吐き捨てられた声音に、俺は初めて肩を震わせた。そんなことを言いたいんじゃない。会うな、なんて、触るな、なんて同じ家に住んでいるのだから無理だってことは分かっている。

俺が今抱いている気持ちも、どれほど馬鹿らしいか知っている。でも…

でも、不安で仕方がないんだ。たったそれだけの理由で、俺は、こんなにもお前を怒らせてしまっている。

肩の震えを抑え込むように、小さく抱いた膝を、さらに強く抱きしめると、うつむいた視界に見慣れた手が映り込んで、俺の握りこんだそれに重なった。

何を思う間もなく、顎を強くつかまれ、グツと後ろへ向けようとされる。咄嗟に抵抗したのは奇跡に近かった。今、俺の顔なんてあ

いつに見られたくなんてなかった。だから精いっぱい抵抗し、頬に食い込む指をのけようとしたが、それはいつの間にか両手まとめて戒められた俺には不可能だった。

努力の甲斐なく、奴の思うままにされても、せめてあいつの顔だけは見るまいと視界を閉ざす。

うんざりしているだろうあいつの顔に、さらにわずらわしさが混ざるのをみたくなかった。あいつに軽蔑されるのが怖かった。そして、嫌われて、興味の一片すら向けられなくなる瞬間が、何より恐ろしかった。

「…ひでえ顔。そんなに厭なのかよ、ケイのこと」

分かってているんだ。この不安の正体なんて。

「何か言えよ」

これは嫉妬。自分に自信のない俺が、俺以外のすべてに向ける、醜い劣等感だ。

「算……………」

ふと訪れた長いような短いような沈黙の後、促されてあいつ…芳井の顔を見る。

その端正な顔に浮かぶのは、困ったような、怒ったようななんとも形容しがたい表情だった。

「俺がお前以外受け付けないって知ってるだろ。それでも駄目なのか」

優しく、少し情けなくも聞こえる声。

わかってる。わかってるんだ。

芳井が俺を嫌う事なんてないこと。たとえそうなくても、率直なこいつが鬱憤をため込んでまで俺といることはないってこと。

こいつの行動すべてが、答えだってこと。

卑屈に過ぎる俺を芳井が嫌わないのは、恋愛感情よりむしろ親の愛情に近い。それだけの歴史を、俺たちは刻んできた。

それでも…

「いいよ。お前が望むなら、他のものなんていくらでも捨ててやる」

他を魅了してやまないその光が、少しでもこの手からこぼれてしまうのが、俺は何より恐ろしい。

こんな関係は間違っているのかもしれない。
けれどこの関係を否定する権利は、俺たち以外、誰も持ちえないのだ。

01 (後書き)

2009/03/16

- 三十分間のタイムラグ -

日付が変わる数分前、いや、もしかしたら今日に日付が変わったときから、明日が待ち遠しく感じていたかもしれない。

そんなさまを算に悟らせる気はなかった。別に、格好付けていたわけではないが、こんなことで落ち着きをなくすのはあいつだけで十分だ。

秒針が進む音が自棄に耳につく夜の静寂の中、算はどうしているかと想像する。

算が日中からそわそわしていた様子には敢えて触れずにいた。日が暮れ、揃って夕食をとったときも、ちらちらと俺を窺う様子を知らぬふりで通した。

あいつは今泣いているだろうか。それとも、すねて、疲れて眠ってしまったのだろうか。

無意味に流れる機械を通した声も、ニュース番組内のそれに変わったところには耐え切れずに電源を落とした。それから働き続けた規則音は、その瞬間に近いことを俺に伝える。

俺はゆっくり自室を出て、はやる足を鎮めながら隣室へ向かった。電気の類は照明を含めすべて落とした。あとは扉を開く音さえ気を遣えば、あいつに気づかれることなく目的を達せられるだろう。

視界に入りこんだ布の山は静かな寝息を漏らしていた。その様を見て、俺はふと、こぼれる笑いを止められなかった。

「なんだかんだ言って、お前も気に入ってるんじゃないか」

俺に気付いたもう一人の同居人を追い出し、俺と箕との、完全な二人きりの空間を作ると、それまでであったぬくもりを取り戻すように箕は己の傍らを手繰った。

その手を抑え込み、ついで肩に手を添え箕が起きた時の準備を整える。そして…

日付が変わった瞬間に、俺は待ち焦がれた言葉を箕の耳に吹き込んだ。

02(後書き)

2009/03/17

- あなたが見えない -

目が覚めるとまだ空は明けてもおらず、見上げた天井は黒に覆われていた。

何故こんな時間に目が覚めてしまったのだろう。その答えは、壁のすぐ向こうからかすかに聞こえた。隣は芳井の居室だ。布団をはねのけた俺は、下階の住人の迷惑も顧みない足音を立てて芳井のもとへ走った。

わざと騒音をたてて扉を開いたのは、あわよくば芳井がこれで目覚めてくれないかという思いと、早く芳井の顔を見たいという思いの両方からだ。けれど願いは半分しか叶わず、もう片方も、想像した通りではあるがこんな苦しそうな様子が望みではなかった。

枕元に灯りを点し、人工の光のもとで見た芳井の額には脂汗がにじんでいる。それを見て、芳井がうなされ始めてどれほどの時間が経っていたのかを臍氣に知る。

きっと、芳井はあの夢を見ているのだろう。夢であって、夢ではない。しかし現実でもない、残酷な記憶。どれだけ時間が経っても、こうして芳井を苦しめる記憶に太刀打ちするすべを持たない自分が、いつもどれほど口惜しいことか。そんな俺と、芳井を苦しめ続ける記憶を心底憎く感じる。

けれど今優先すべきは、なによりも芳井をそこから救いあげることだ。

呼びかけ、頬を張って、肩をゆすってようやく開かせた芳井は、

しかし俺の元には戻ってこなかった。

意味のない言葉をなおも吐き続け、開いた虚ろを映す瞳から絶え間なく涙を流して痛々しく震える。

涙は時に血から精製されるといふが、芳井のはまさにそれだ。比喩ではなく、幼い芳井が流したそれが流れているのだ。

泣き暴れる芳井を、あの時できなかった代わりにしっかりと抱きしめて背を諭す。

ゆっくりゆっくり、帰って来いと願いを込めてさす。そして早く過去から戻って来いと…俺の所へ戻ってきてほしいと絶る。

駆け付けた時、人形のようになってしまうていた芳井がいた所は、現実ではありえなかった。夢なんて、生易しい言葉で終わらせてしまうにも、あれはあまりに強烈だった。

それから失ってしまった、以前の芳井はもうどこにも存在しないが、俺が求めているのは、今、この瞬間をイキル芳井だよ。

だから早く戻って来い芳井。

お前が視線を向けていいのは、過去ではなく、この俺なんだ。

03(後書)

2009/03/18

- 濁った硝子の向こう -

俺を取り巻くすべてはまるで霧に包まれたかのようにぼやけてい
る。

いつからとかどうじて、何てことは気にならない。気づいたらそ
うだったのだから、もしかして生まれた時からそうなのかもしれない。
い。

けれどそれは俺が周囲を見渡した時の情景ではなく、周囲が俺を
見た時にそう感じるよう、作られた壁だ。袖振りあつただけの見知
らぬ他人に俺という本質を見せることに対する嫌悪感を、俺は霧と
同じころから感じていた。

煩わしい他。あいつを排斥しようとする、その他大勢。

何も知らないヒトガタたちに、俺は俺の真実を一片たりとも触れ
させはしない。

今日もまた、蠅のようにたかってくるそれらをいなして、俺は俺
の本質の待つ家路をたどる。

04(後書き)

2009/03/19

- 足元は泥濘に消えゆく -

そして、俺と芳井の日常は穏やかに過ぎてゆく。

ふと目が覚めると、辺りは既に薄暗くなっていた。

今日は珍しく早くに帰宅できたので、久しぶりに芳井の好物を大量の食材を買い込み、下ごしらえまでを済ませて休んだソファで、本当に眠ってしまったようだ。

今が何時か、と思いい体を起こすと、足元に固いような柔らかいようなものが当たる。そして、

「…いてえ」

不機嫌ここに極まると言わんばかりの形相の、芳井が身を起こした。

「お、おかえり」

どうやら寝ている間に言いそびれてしまった挨拶を口にする、彼は聞きとりづらい低い声ながらも返答をくれた。そのことにほっとする間もなく、俺は芳井にソファから蹴落とされた。…さすが芳井、1回は1回、だった。

「つか、こんなとこで何寝てたんだよ」

その、声音と表情のアンバランスさに思わず頬が緩む。

目ざとくそれを見とった芳井の眼光を受け、俺は慌てて理由を話したが、けれど全て言い終える前に俺は腕をつかまれて自室へと連行された。

「芳井：？」

「いいから寝ろ。とろいお前のことだから気づいてないだろうが、ひでえ顔色してるぞ」

そう言っつて隣へもぐりこんできた芳井に慌てるも、再度腕をつかめれ、強制的におとなしくさせられた状態ではそれも長くは続かなかつた。けれどもし抑え込まれなくても、俺はきつと慌てていたと思う。

滅多にはつきりとしたことを口にしない芳井が、俺のことを気遣つてくれたのだから、そうでなければここにいるのは俺じゃない誰かだとすら言える。

嬉しさと、多少の気恥かしさに焼かれた頬を枕で隠し、添い寝する芳井の体温がさそう心地よい眠りへと舞い戻っていった。

時々、思う事がある。

この関係は正しくはない。傷の舐めあいにすぎないのだと。しかし俺たちの関係は、正しいことの方が間違いなのだ、そう感じる。

誰かにとって正しいことが俺達を切り刻んだように、誰かを不快にさせることが俺たちには無二の道なのだ。

柔らかく芳しい香りに誘われてベッドを後にする。リビングから続くキッチンには、見慣れた後姿があった。

その背におはよう、と、何をしているのか、と尋ねると、芳井は人の悪い顔を俺へ向けた。

「ちようどいい所に起きてきたな」

そして何を思う間もなく、俺は昨日のように、しかし昨日とは明らかに違う理由と目的で腕をひかれた。

「1回は1回、だろ？」

上機嫌の芳井。本来なら喜ばしいそれが俺にはどうしても憎く見

えてしまうのは、今の俺にはしようのないことだと思う。

さんざん引つ張られ、振り回された末に告げられたのは、不可抗力とは言え、芳井から与えられた俺への理不尽な罰だった。いわく、「期待させた責任はとれ」

…と。

つまりは昨日の夕食の支度だけして寝てしまったことへの腹いせだろう。目覚めを促してきた、今朝の芳香の正体は芳井がしたくした、俺の好物のそれだった。

さんざんな目に遭い、半ば筋肉痛になりかけの体を酷使して俺は作業台の前に立っている。

それに文句だけはこぼさないでいられるのは、隣に芳井がいて、共に仕上げ作業にいそしんでいるからだ。

捻くれ者で、けれどとても素直な。そんな芳井と歩むのは、針の隠れた帳よりも光さず朝がいい。

そんな穏やかな日常を、俺と芳井は噛みしめている。

05(後書)

2009/03/20

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2372q/>

短編集 掌篇

2011年1月26日08時30分発行